



増毛 駅舎や商家に往時を偲ぶ

巖谷 國士 *Iwaya Kunio*

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリズムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリズムとは何か』ほか多数、近著に『滝澤龍彦論コレクション』全5巻。初夏にはまた来道の予定。

留萌駅の一角には「懐かしの留萌本線」というコーナーがあり、写真などの資料が展示されていた。もちろん留萌本線はいまでも深川駅から運行していて、終点が留萌駅なのだが、かつてその先に伸びていた増毛駅までの路線が2016年12月5日に廃止されたため、その区間17キロほどを走っていた列車や、沿線の風景などをうつした古い写真を並べて、思い出のよすがとしている。

撮影者にはその道のプロも土地のアマチュアもいるようで、撮影年不明のものも多いけれど、国鉄最後の蒸気機関車となったD61の勇姿や、雪のなかのラッセル車、旧式の鉄橋、木造の駅舎などが、老齢の旅人には懐かしい。半世紀ほど前に国鉄周遊券で北海道をめぐっていたころ、列車といえばS Lのイメージだった。オホーツク海岸を稚内へと北上する天北線とか、標茶から中標津をへて根室標津にいたる標津線（駅名をまちがえやすい）とか、いまはなき路線の風景も目にうかんでくる。

増毛駅の最終運行日の写真もあり、全国から集まってきた鉄道写真家や、いわゆる「テツ」たちや、別れを惜しむ住民たちの様子がわかる。ここは1981年の大ヒット映画『駅 STATION』（降旗康男監督、倉本聰脚本、高倉健主演）の舞台として、すでに有名だつ

たからでもあるだろう。

現在はバスで行くしかないが、日本海に沿った国道からの眺めがよかった。明るい青空だが海はかなり荒く、波頭がきらきら光っている。20分ほど走って右折し、増毛町の中心部に入ると、たいして離れていない隣町なのに、留萌市とはまるで違う世界に来たような気がする。

旧・増毛駅の近くで降りた。空き地のような広場の奥に、黒い平屋の建物が見える。初期の駅舎を復元しているとのことだが、「増毛駅」と手書きされた看板の右手には孝子屋という土産物の食品店があり、横に旧式の真っ赤な郵便ポストが立っている。

プラットフォームへの出口は欄間のある木格子のガラス戸で、手前に増毛出身の著名シェフ・M氏の等身大の写真。フランス料理を始めた氏の料理は東京の店で賞味しているが、増毛の別荘漁港の近くにもその監修になる店「オーベルジュましけ」があって、山海の珍味が観光客にも人気らしい。

プラットフォームには当然ながら人影も列車の勇姿もなく、港のほうまで視野がひらけている。それでも廃線になったのはつい最近だから、いまにも列車のやってきそうな気配がある。留萌本線が増毛まで開通したのは1921年なので、100年近くのあいだ運行して



元・増毛駅。初期の駅舎を復元し、観光ポイントとして残してある。食品・土産物の店も入っている。撮影：筆者

いたことになり、戦争をはさんだその間の歴史も思いおこされてくる。

駅舎の正面には左右対称三階建の古い木造建築がそびえていて、切妻部分に右書きで「旅館 富田屋」とある。1933年建造。右どなりの木造二階建はやや洋風で「風待食堂」。角をまがって正面を見ると「多田商店」という看板がのこっていて、これも同年の竣工だが、もとは1914年創業の雑貨店だったらしく、現在の看板にも「食料品 雜貨 コーラ・ジュース・飲物 たばこ 切手 印紙」とあるのが懐かしい。コンビニなどなかつた時代には、町にひとつやふたつ、食堂を兼ねたこういう便利な商店があったものだ。

別に「観光案内所」の看板もかかっているので入ってみると、右に和風のバーがあってその先が食堂。左は文字どおりの雑貨店で、奥の一角がどうやら観光案内所のようだ。中年の女性店員が地図やパンフレットを出してくれたので、町歩きの準備が整った。

その間、しきりに「デジャヴュ（既視）」の感覚がよぎった。というのも、これらの建物がある映画『駅 STATION』の舞台になっていたから、ばかりではないだろう。1980年代までの北海道で、あるいは列島の各地でも、こういう万能の雑貨店に出会うことが多かったからではないか、と思われた。

いまも「街区整然、道路広潔」…

増毛の語源はアイヌ語の「マシュキニ／マシュケ」で、カモメの多いところの意だという。道北では早くから和人の入った土地のひとつで、18世紀には松前藩の商人の申請でマシケ場所が置かれた。19世紀はじめ

に津軽藩、ついで秋田藩の陣屋が建ち、明治初年には留萌支庁の出張所が設けられて開拓が進んだ。1874年に札幌からやってきたアメリカ人の鉱山技師ライマンは、紀行文にこう記している。

「留萌の駅はさほど大村にあらず、増毛は大村にて、その宿は最も美しく北海道で目撃したるものの中で最たるもの。且つ、その住民、外国人を珍しく思うの情もすこぶる多し。その情たるは、おそらくその教化の^{やや}稍厚きと、住民の知識稍進むにより起これるならん……。」（増毛町ホームページ「増毛の歴史を振り返る」より）

留萌よりも大きな村で宿が美しく、住民の情が厚く、教化・知識もなかなかのものだということで、すでに立派なコミュニティーだったのだろう。7年後には留萌の郡役所が増毛に移された。明治初期からはニシン漁と北前船の交易で栄え、1890年には人口2087人。その住民数を記した佐藤喜代吉による同年の旅行記では、こんなふうにも語られている。

「増毛市街は、北海道13市街の一つにして天塩国第一の都会なり、南、暑寒沢を負ひ、北、海を抱き、東、増毛村に接し、西、暑寒別川を帯ぶ、街区整然、道路広潔なり……。」（同上）

こうしてみると、明治なかばまでの増毛村は一種のユートピアだったのではないか、とさえ思われる。だが1907年には暴風におそわれて甚大な被害をこうむり、支庁舎を焼失。国費導入による築港計画でも競願していた留萌に敗れ、1914年には増毛支庁そのものが留萌支庁に移行して今日にいたっている。

大正年間に留萌一増毛間の鉄道開通もあり、昭和初期にはニシンの漁獲漁もピークに達して、増毛はかなり豊かだったようだ。駅前から西へ進むと、すぐ右に見えてくる増毛館という旅館の建築も、駅前の2軒と同時期（1932年）に建ったものだ。いまは「ぼちぼちいこか増毛館」と呼ばれているが、アーチ形の入口にダイヤ形の窓、2階には扇形の欄間のついたダブルハンギングの窓がならぶ洋風の建築で、鄙びたかわいいモダニズムを感じる。増毛にはこの種の建物が当り前のように点在している。

高層ビルなどひとつもないこの通りは見はらしもよく、広々として清潔で気持がいい。100年以上前の「街区整然、道路広潔」という表現がいまも通用するかもしれない。鉄道の便がなくなった今日、旭川からも札幌からもかなり遠く、車の通りも多くないこの古い町の空間は、もしかすると、観光地としてある意味では理想的なのではあるまいか、と思われました。

その観光の最大の見どころとされる「旧商家 丸一本間家」も、増毛館のならびにさりげなく現存する。明治初期から20年以上かけて1902年に完成したという店舗兼邸宅で、ひときわ古い豪壯堅固な建物なのだが、増毛の町ではほとんど違和感がない。歩道からそのままま、すこしだけ大きな家を訪問するような感じで、気軽にに入ってゆけるようになっていた。

旧商家に懐ぶ昔日の栄華

丸一本間家の祖は佐渡で生まれて小樽で修業した商人・本間泰蔵^{たいぞう}で、1875年に増毛へ来てまず荒物雜貨店をひらいた。折からのニシン景氣で成功し、呉服商、網元、海運、醸造などに事業をひろげて、天塩国一の豪商となった立志伝中の人物だが、20年ほどかけて建造・増築をつづけ、1902年にこの建物を完成させた。

客は私だけである。受付にいた初老の夫妻は本間家ののかただらうか、訪問の目的などをすこし話すと、ご主人のほうが案内に立ってくれた。内部は想像よりもずっと奥行があり、天井も高く、一直線にのびる土間の左側に店舗と住居、右側に事務所と貯蔵庫と醸造蔵があつて、奥の階段から2階・3階へもあがれる。

まず道路に面した「呉服店舗」を見た。土間には常夜灯や荷車が置かれていて明治の雰囲気がただよう。帳場に金庫や火鉢、鏡台や衣桁などを配した畳敷きの

空間は奥行が3間ほどもあってかなり広い。背後の木の棚には丸一の紋（丸に一の文字）のついているたくさんの箱に、色とりどりの反物^{たんもの}の数々。復元したものも多いというが、北方の古きよき時代を偲ばせる展示だった。

奥帳場も覗いてから茶の間や仏間へ。緑濃い中庭に沿った広廊下がすばらしい。欄間もある二段の格子戸はデザインがみごとで、午後の陽をうけて輝き、廊下に影をおとしている。さらに奥の間や客間へ行くと趣が变了。三方をかこむ襖の全体に、黒々とした漢詩^{かんじ}（蘇軾の『後赤壁賦』など）の文字が散りばめられていたからである。

じつをいうと、これはたまたま私の曾祖父にあたる巖谷一六居士（本名・脩）の揮毫した漢詩で、私的なことだから伏せるつもりでいたのだが、2室にわたって実物が一般公開されている以上、ここに書きとめておくべきだろう。本間氏から聞いた成立の事情も、なかなか興味ぶかいものである。

巖谷脩は明治政府の太政官大書記官で貴族院議員だったが、もとは水口藩の御殿医にして漢詩人でもあり、とくに書道では「明治三筆」のひとりとして広く知られていた。といつても遊び好きだったようで、一六という号は「一と六の日は遊ぶ」方針をあらわすものらしい。しかも経済観念がゼロに近く、証文の失敗から破産寸前にいたったとかで、息子の作家・巖谷小波も、曾孫の私自身にしても、実業と資産にはまったく縁のない血筋である。

それはともかく、明治の後半にこの一六居士がはるか増毛まで来たという事実は興味ぶかく、東京からの距離とルートを想像するだけで私がわくわくしてしまうのは、小波もふくめて旅を好む家系のせいかもしれない。本間家のご主人の説明によると、一六居士は小樽にいたのを招待され、船で増毛までやってきたのだという。

明治期にも北前船の通っていた増毛港だが、1885年には小樽からの往復航路がひらかれていた。身欠ニシンや肥料用ニシン粕、数の子をはじめ、昆布や干魚などの産地として、また交易の拠



丸一本間家の内部、中庭に面した窓と廊下もすばらしい。
撮影：筆者



点として、増毛はすでに重要な位置を占め、人口は2000強でも、文化の移植もできる豊かな村だったのである。

丸一本間家には小博物館のような展示室もあって、かつての北前船らしい帆船の模型が置かれていた。さらに食器や道具類や、人形のコレクションまであるのがおもしろい。清新しくも見える雛人形や武者人形のセットなど、一瞬、ここは北海道だろうかと訝られたほどである。

実際、この本間家とは無縁らしい山形県酒田の本間家とか、富山市岩瀬の森家などの住宅とくらべても、この丸一本間家はよく似ているだけでなく、いっそう堅固でセンスのいい建物という印象がある。増毛とは不思議なところだ。北海道にいながら本州の日本海岸を感じるような、だが日本にいながら別の国を感じるような、なにかしら無国籍風の居心地よさのある町なのだ。

最北の酒蔵から増毛港まで

丸一本間家には古い酒造蔵も残っていて、1882年以来、本間泰蔵が酒造りもしていたことがわかる。当時の北海道で日本酒といえば、本州から移入されるものが大半で高価だったため、この先駆的な酒造業も成功をおさめ、住宅が完成した年には同じ道のすこし先に、これまた立派な最北の酒造所を創設した。

行ってみると「國稀酒造」の看板があり、観光客がかなり来ていた。入口近くの売店には、日本酒だけでなく酒を用いた食品や菓子、いわゆるレトロなグッズなどが並んでいる。「きき酒」カウンターもあって、さまざまな銘柄の日本酒を試飲させてくれる。奥には歴代の酒瓶やラベルのコレクションが展示されていて、小さな日本酒博物館さながらである。

丸一本間家の奥の間。1902（明治35）年8月に巖谷 一郎（いちらく こうじ）が揮毫した漢詩の襖にかこまれている。左の4枚は蘇軾（蘇東坡）の『後赤壁賦』、右端の2枚は仲長統の『樂志論』だが、中央2行は一六居士自身の作ではないかともいわれる。撮影：筆者

さらに進むと巨大な貯蔵タンクのならぶ部屋もあり、だんだん酒造所らしくなる。増毛産の軟石で築いたという建物の内部は薄暗く、洞窟のように奥へ奥へと導かれる。

売店に戻ってふと見ると、土間で果物を売っている初老の女性たちがいた。季節柄、赤く熟れたサクランボがかわいい。近郊の果樹園から運んできたそうで、増毛が北海道有数の果実産地であることを思いだす。明治に栽培のはじまったリンゴのほか、いまではイチゴ、ブルーベリー、プラム、モモ、ナシ、ブドウなどもとれる。女性たちの話を聞いてから好物のサクランボを求め、食べながらまた町を歩く。

秋田藩の陣屋跡地にできている総合交流促進施設・元陣屋や、1901年建造の本殿の残る巖島神社を見てから、海の見える坂道を降りて、物産店などを覗き、駅舎を迂回して増毛港に着いた。北のヨットハーバーに白い船たちの望まれる美しい港で、留萌とは違う明るさが漂う。すぐ近くにある港町なのに似ていない。増毛では寂しさ・切なさよりも、それを通りこした透明さといったものが感じられる。

敗戦直後にはニシン漁がふたたび栄え、住民も2万近くまでふえていたが、1955年からはニシンが来なくなり、人口も当時をピークに減少する一方で、1970年には「過疎地域」に指定された。その後も台風や冷害などに襲われながらも、町は各分野で健闘している。漁業もアワビの育成やスケソウダラで盛りかえし、いまもアマエビなどは漁獲量全国一である。

それでも人口の減少はとまらず、現在は4000人強。だが、だからこそ町は簡素で、清潔で、観光的なのに卑しくも騒がしくもなく、恬淡とした風情を保っている。増毛がいまなお北海道でも有数の、美しい、不思議な町であることには変りがない。

國稀酒造のきき酒（試飲）カウンター。撮影：筆者

